

飛驒の文化 斐太の歴史



平成19年4月に死去した父 大野政雄は、約40年間就いていた教職の大半を旧制斐太中学・斐太高校で過ごし、その期間は昭和44年3月に定年退職するまでの27年8ヶ月に及びました。

今と違い昔は教員の転任には本人の意向がかなり強く反映されたと聞きますが、それにしてもこんな長く同じ学校に留まるとなると、管理サイドとの軋轢も少なくなかったかと思われます。

42歳で教務主任・教頭に就いています。が、47歳のとき一般教諭に逆戻りし、そのまま定年まで斐太高校で過ごしました。父と二人で酒を酌み交わしたある晩、この辺の事情について一度尋ねたことが

ありますが、「校長昇任を条件に美濃地方の高校への転勤を求められたので、郷土史研究のこともあり、平に戻って斐太高校に残ることにした。」との答えでした。本当のところはどうであったかははっきりしませんが、異動昇任を蹴って残留降任を希望するようなことは、なかなかできることではありません。

このこと一つをとっても、父が並の間ではなかったことが判ります。世間体にとらわれずにあくまで自分の意志を貫く強い性格が私に少しも遺伝しなかったことを誠に残念に思います。

教職の傍ら、郷土史や考古学の研究を重ね、斐太高校を定年退職後は古川町史の編纂にも精力的に取り組んでいました。享年98歳で亡くなる直前まで研究を続け、その成果を地元の雑誌・新聞などに多数発表しています。しかし、亡父の死とともにこれらの原稿が埋もれてしまう恐れもありましたので、昌文、尚典、勝利の3人の兄と相談の上、昨年春に「飛驒の文化 斐太の歴史―大野政雄著述集―」を発売しました。飛驒出身の方などで父を

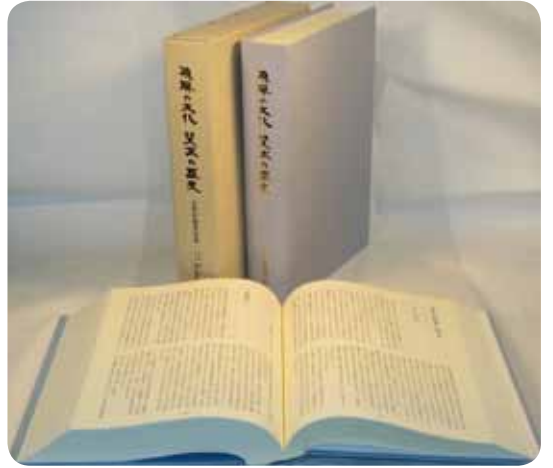
大野博見（高山市出身）

ご存じの方が県人会の中にもおられるのではないかと思いますので、『岐阜ネット』の誌面をお借りして本書について簡単に紹介させていただきたいと思えます。

本書は、第1部著述編、第2部思い出の記編、第3部資料編の3部構成になっています。亡父の活動歴ことにまとめた著述編の第1章郷土史には、郷土の生んだ偉大な国学者田中大秀、江戸時代の著名な弄石家二木長嘯、飛驒の二大騒動大原騒動・梅村騒動、さらには美濃の三宅石翁・神田幸平等に関する原稿が119編。



生前の大野政雄氏（1909～2007）



刊行された大書

第2章考古学には、全国的にもその名が知られている旧国府町の村山遺跡や旧古川町の沢・堂之上・杉崎廃寺遺跡などの原稿が36編。

第3章斐太高校には、「校歌物語」、「トンボ・白線縁起」、「巴陵はりょうという名」など校史を中心とした原稿が23編。

第4章飛騨古川の26編と第5章随筆等の10編を合わせ、著述編には214編の原稿を収録しました。

なお、第5章掲載の「島崎正樹詩集」は、島崎藤村から亡父あての手紙を原稿化したものですが、この手紙の原本を「何でも鑑定団」に出品したところ、120万という評価額がつき大変嬉しい思いでした。昨年8月2日に放映されたこの番組を見られた方もおられるかもしれません。

が、その後司会の島田紳助の不祥事が発覚し、紳助の登場番組が一切再放送されないことになってしまったのは極めて残念です。

第2部には、生前亡父と交流のあった土野守前高山市長を始め13名の方の「思い出の記」を、また第3部には、亡父の著述目録・年譜等をまとめた資料を掲載し、冒頭の写真・序、巻末の編者後書き等も加えると、全体で千頁を超える大部な本となりました。

名古屋高速道路公社理事
（斐太高校昭和42年卒）



島崎藤村からの手紙

△編集部からのお知らせ▽

本書に関心を持っていただけました方には、定価7,000円のところ、投稿者のご好意により特別割引価格（5,000円、送料別）で頒布していただけるそうです。

ご希望の向きは、直接

斐太中央印刷株式会社

〒500-0841

高山市下三之町14

電話：0577-13510350

までご連絡ください。

なお、県人会にも一冊ご寄付戴きました。ご希望の向きには左記にて閲覧に供しておりますのでご利用下さい。

千代田区平河町 都道府県会館

岐阜県東京事務所

東京岐阜県人会事務局

